

悔懺磨歌

江戸名人伝

二完枝邦

青空文庫

「うツふふ。——で、おめえ、どうしなすった。まさか、うしろを見せたんじやなかるうの」

「ところが師匠ししょう、笑わねえでおくんなせえ。忠臣蔵の師直もろのおじやねえが、あつしやア急に命が惜しくなつて、はばかりへ行くふりをしながら、禪ふんとしもせずに逃げ出して来ちまつたんで。……」

「何んだつて。逃げて来たと。——」

「へえ、面目めんぼくねえが、あの体で責めせられたんじや命が保たねえような気がしやして。……」

「いい若え者が何て意気地いぐじのねえ話なんだ。どんな体で責められたか知らねえが、相手はたかが女じやねえか。女に負けてのめのめ逃げ出して来るなんざ、当時彫師ほりしの名折ンなるぜ」

「ところが師匠、お前さんは相手を見ねえからそんな豪勢な口をききなさるが、さつきも

いった通り、女はちやうど師匠が前に描きなすった、あの北国五色墨^{ほつくごくごしきずみ}の中の、てつぽうそつくりの体なんです。……」

「結構じゃねえか。てつぽうなんてものは、こつちから探しに行つたつて、そうざらにあるもんじゃねえ。憂曇華^{うどんげ}の、めぐりあつたが百年目、たとえ腰ツ骨が折れたからつて、あとへ引くわけのもんじゃねえや。——この節の若え者は、なんて意気地がねえんだろうの」背の高い、従つて少し猫背の、小肥^{こぶと}りに肥つた、そのくせどこか神経質らしい歌麿^{うたまろ}は、きちじよう^{きちじよう}の裕^{あわせ}の袖口を、この腕のところまで捲^まり上げると、五十を越した人とは思われな^{でんぼう}い伝^{でん}法な調子で、縁先に腰を掛けている彫師の亀吉を憐れむように見守つた。

亀吉はまだ、三十には二つ三つ間^まがあるのであろう。色若衆^{いろわかしゆう}のような、どちらかといえば、職人向でない花車^{きやしゃ}な体を、きまり悪そうに縁先に小さくして、驚^{おど}づかみにした手拭で、やたらに顔の汗^{あせ}を擦^{こす}つていた。

歌麿は「青楼十二時^{せいろうじふにし}」この方、版下を彫^ほらせては今古^{こんこ}の名人とゆるしていた竹河岸^{たけがし}の毛彫^{けぼり}安^{やす}が、森治^{もりじ}から出した「蚊帳^{かや}の男女^{だんじよ}」を彫つたのを最後に、突然死去して間もな^{けぼりやす}く、亀吉を見出したのであるが、若いに似合わず熱のある仕事振りが意になつて、ついこの秋口、鶴喜^{つるき}から開板^{かいはん}した「美人島田八景」に至るまで、その後の主立^{おもた}つた版下は、

殆ど亀吉の鑿さくとう刀まを俟たないものはないくらいであつた。

一昨年ひっかの筆禍事件以来、人氣が半減したといわれているものの、それでもさすがに歌麿のもとへは各版元からの註文が殺到して、当時売れっ子の豊国とよくにや英山えいざんなどを、遙かに凌駕りやうがする羽振りを見せていた。

きょうもきょうとて、歌麿は起きると間もなく、朝歸りの威勢のいい一九いっくにはいり込まれたのを口開くちあけに京伝きやうでん、菊塙きくかう、それに版元の和泉屋市兵衛など、入れ代り立ち代り顔を見せられたところから、近頃また思い出して描き始めた金太郎の下絵をそのままにして、何んということもなくうまくもない酒を、つい付合つて重ねてしまったが、さて飲んだとなると、急に十年も年が若くなつたものか、やたらに昔の口説くぜつが恋しくてたまらなくなつていた。

そこへ——先客がひと通り立去つた後へ、ひよっこり現れたのが亀吉だつた。しかも亀吉から前夜浅草おくやまで買つた陰女やまねこに、手もなく敗北したという話の末、その相手が、曾て自分が十年ばかり前に描いた「北国五色墨ほっこくごしきすみ」の女と、寸分の相違もないことまで聞かされては、歌麿は、若い者の意気地なさを託かこつと共に、不思議に躍る己おのが胸に手をやらずにはいられなかつた。

「亀さん」

しばし、じつと膝のあたりを見詰っていた歌麿は、突然目を上げると、引ッ吊るように口をゆがませて、亀吉の顔を見つめた。

「へえ。――」

「お前さん今夜ひとつ、おいらを、その陰女やまねこに会あわせてくんねえな」

「何んですって、師匠」

亀吉は、この意外な言葉に、三角の眼を菱型ひしがたにみはった。

「そう驚くにや当るまい。おいらを、お前さんの買った陰女に会わせてくれというだけの話じゃねえか」

「冗談じょうだん いっちゃいけません。いくら何んだって師匠が陰女なんぞと。……」

「あッはッは。つまらねえ遠慮はいらねえよ。こっちが何様じゃあるめえし、陰女に会おうがどぶ女郎に会おうが、ちつとだつて、驚くこたアありやしねえ」

「それアそういやそんなもんだが、あんな女と会いなすつたところで、何ひとつ、足たしになりやアしやせんぜ」

「足しになろうがなるめえがいいやな。おいらはただ、お前の敵かたきを討うってやりさえすりや、

それだけで本望^{ほんもう}なんだ」

「あつしの敵を討ちなさる。——冗^{じよ}、冗談いっちゃいけません。昔の師匠ならいざ知らず、いくら達者でも、いまだきあの女を、師匠がこなすなんてことが。——」

「勝負にやならねえというんだの」

「お気の毒だが、まずなりやすまい」

「亀さん」

歌麿は昂然^{こうぜん}として居ずまいを正した。

「へえ」

「何んでもいいから石^{こくちよう}町の六^むつを聞いたたら、もう一度ここへ来てくんねえ。勝負にならねえといわれたんじや歌麿の名折^{なわれ}だ。飽くまでその陰女に会って、お前の敵を討たにやならねえ」

おめえの敵と、口ではいつているものの、歌麿の脳裡^{のうり}からは、亀吉の影は疾^とうに消し飛んで、十年前に、ふとしたことから馴染^{なじみ}になったのを縁に、錦^{にしきえ}絵にまで描いて売り出した、どぶ裏の局女^{つぼねじようう}郎^{みようがや}茗荷屋^{わかづる}若鶴^{わかつる}の、あのはち切れるような素晴らしい肉体が、まざまざと力強く浮き出て来て、何か思いがけない幸福^{しあわせ}が、今にも眼の前へ現れでもする

ような嬉しさが、次第に胸を掩おほつて来るのを覚えた。

「師匠、そいつア本当でげすかい」

「念には及ばねえよ」

「これアどうも、飛んだことになっちまった」

亀吉は、間伸まのびのした自分の顔を、二三度くるくる撫で廻すと、多少興味を感じながらも、この降つて湧わいたような結果に、寧ろ当惑の色をまざまざと浮べた。

が、歌麿に取つては、亀吉がどう考えているかなどは、今は少しの屈托くつたくでもないであろう。断えず込み上げて来る好色心が、それからそれへと渦うずを巻いて、まだ高々と照り渡っている日の色に、焦慮しょうりょをさえ感じ始めたのであった。

「で、亀さん」

「へえ」

「女はいつて、え、いくつなんだ」

「二十四だとか、五だとかいつておりやした」

「二十四五か。そいつアおつだの。男には年がねえが、女は何んでも三十までだ。さつきお前さんのいった北国五色墨ほつくごくごしきすみの若鶴という女も、ちょうど二十五だったからの、うつふ

ッふ」

歌麿の胸には、若鶴の肌が張り付きでもしているような緊張した快感が大きな波を打っていた。大方河岸から一筋に來たのであろう。おもてには威勢のいい鰯売が、江戸中へ響けとばかり、洗ったような声を振り立てていた。

二

今まで五重塔の九輪に、最後の光を残していた夕陽が、いつの間にやら消え失せてしまふと、あれほど人の行き來に賑わつた浅草も、たちまち木の下闇の底氣味悪いばかりに陰を濃くして、襟を吹く秋風のみが、いたずらに冷々と肌を撫でて行つた。

燃えるような眸で、馬道裏の、路地の角に在る柳の下に佇つたのは、丈の高い歌麿と、小男の亀吉だつた。亀吉は麻の葉の手拭で、頬冠りをしていた。

「じゃア師匠、夢にもあつしの知合だなんてことは、いっちゃいけませんぜ。どこまでも笹屋の寅に聞いて來た、ということにしておくんなさるなきや。——」

「安心しねえ。お前のような弱虫の名前を出しちや、こつちの辱ならア」

「ちえツ、面白くもねえ。もとはといやア、あつしが負けて来たばかりに、師匠の^{でまく}出幕になつたんじやござんせんか」

「いいから置いときねえ。敵は^{かたき}とつてやる」

「長屋は奥から三軒目ですぜ」

「^{がつてん}合点だ。名前は^{ちか}お近。――」

「おつと師匠、^{たばこいれ}蓑入が落ちやす」

が、歌麿はもう二三歩、路地の溝^{どぶ}板^{いた}を、力強く踏^ふんでいた。

亀吉が頬冠りの下から、闇を透^{すか}して見ている中を、まっしぐらに奥へ消えて行つて歌麿は、やがて、それとおぼしい長屋の前で足を停^とめたが、間もなく内から雨戸をあけたのであろう。ほのかに差した明^{あか}りの前に、仲^{まいづる}蔵^やに似た歌麿の顔が、写^{うつ}し絵^えのように黄色く浮んだ。

「おや、何か御用ですかえ」

それは正^{まさ}しく、お近のお袋の声だった。

「ちつとばかり、お近さんに用ありさ。――まア御免よ」

ただそれだけいって、駐^{ちゆうしゆんてい}春亭の料理の笹^{ささ}折^{おり}をぶら提^さげた歌麿の姿は、雨戸の中

へ、にゆツと消えて行つた。

「いけねえ。師匠はやつぱり慣^なれている。――」

茫然^{ぼうぜん}と見守つていた亀吉は、歌麿の姿が吸いこまれたのを見定めると、嫉妬^{しと}まじりの

舌打を頬冠りの中に残して、元来^{もとぎ}た縁生院^{えんじやういん}の土塀^{どべい}の方へ引返した。

中へはいった歌麿は、如才^{じよさい}なく、お袋に土産物^{みやげもの}を渡すが否や、いっぱしの馴染^{なじみ}でも

あるかのように、早くも三畳の間^まへ上り込んでしまったが、それでもさすがに気が差したのであろう、ふところから手拭を取出して、額^{ひたい}ににじんだ汗を拭くと、立ったまま小声で訊ねた。

「お近さんは留守かい」

「いやだよ。そんな大きな眼をしてながら、よく御覧なね。その屏風^{びやうぶ}の向うに、芋虫^{いもむし}のように寝てるじゃないか」

「芋虫。――うん、こいつア恐れ入った」

なるほど、お袋のいった通り、次の間の六畳の座敷に、二枚折^{ふたまいおり}の枕屏風にかこまれて、薩摩焼^{さつまやき}の置物をころがしたように、ずしりと体を横たえたのが、亀吉の謂^いう「五色墨」なのであろう。昼間飲んだ酒に肥^おった己^{おの}が身を持て余^{あま}していると見えて、真岡木綿^{もうかもめん}の浴衣^{ゆかた}

に、細帯をだらしなく締めたまま西瓜すいかをならべたような乳房もあらわに、ところ狭きまで長々と寝そべっている姿が、歌麿の目に映えいじた。

「お近さん」

「え。――」

突然聞き馴なれない男の声で呼び起されたお近は、びくツとして歌麿の顔を見つめた。

「よく内にいたの」

「お前さん、誰さ」

「ゆうべおめえに可愛がってもらった、あの亀吉の伯父だ」

「え、あの人の伯父さんだつて」

「そうよ。そんなにびつくりするにや当らねえ。なぜおれの甥を可愛がってくれたと、物言いをつけに来た訳わけでもなけりや、遊んだ錢を返してもらいに来た訳でもねえんだ。おまえに、ちつとばかり頼みがあつて、わざわざ駐ちゆうしゆんてい春亭の料理まで持って出かけて来たくれえだからの」

「おや、何んて酔すいきよう狂きやうな人なんだろう。あたしのような者に、頼みがあるなんて。――」

「そういいながら、ようやく起き上ったお近はべたりととんび脚あしに坐ると、穴のあくほど

歌麿の顔を見守った。

「おかしいか」

「そうさ。あたしやお前さんが思つてるほど、頼りになる女じゃあないからねえ」

「うん、その頼りにならねえところを見込んで頼みに来たんだ。——それ、少ねえが、礼は先に出しとくぜ」

親指の爪先から、弾き落すようにして、きーんと畳の上へ投げ出した二分金ぶしんが一枚、擦れた縁の間へ、将棋しょうぎの駒のように突立った。

「おや、それアお前さん、二分じゃないか」

お近は手にしていた煙管きせるの雁首がんくびで、なま新らしい二分金を、手許てもとへ搔かきよせたが、多少気味の悪さを感じたのであろう。手には取らないでそのまま金と歌麿の顔とを、四分六分にじつと見つめた。

「どうだの。ひとつ、頼みを聞いちやくれめえか」

「さアね。大籬おおまがきの太夫衆たゆうしゅうがもらうような、こんな御祝儀を見せられちゃ、いやだともいえまいじゃないか。だがいったい、見ず知らずのお前さんの、頼みというのは何さ。あたしの体で間に合うことならいいが、観音様の坊さんを頼んで、鐘搗堂かねつきどうの鐘かねをおろし

て借りたいたなんぞは、いくら御祝儀をもらつても、滅多に承知は出来ないからねえ」

「姐さん、おめえ、なかなか洒落者だの」

「おだてちゃいけないよ」

「おだてやしねえが、観音様の鐘は気に入った。だが、おいらの頼みはそんなじやねえ。観音様の鐘のように大きいおめえの体を、二一時ばかりままにさせてもらいてえのよ」

「あたしの体を。――」

「そうだ。噂に違わず素晴らしいその鉄砲乳が無性に気に入ったんだ。年寄だけが不足だろうが、さりとて何も、おめえを抱いて寝ようというわけじゃねえ。ただおめえが、おいらのいう通りにさえなってくれりや、それでいいんだ。――どうだの、お近さん。ひとつ、色よい返事をしちやアくれめえか」

ぐつと一膝乗り出した歌麿の眼は、二十の男のような情熱に燃えて、ともすれば相手の返事も待たずに、その釣鐘型の乳房へ、手を触れまじき様子だった。

「ほほほ。改まっていうから、どれほど難かしい頼みかと思つたら、いつそ気抜けがしちまつたよ。二一時でも三時でも、あたしの体で足りる用なら気のすむまで、ままにするが

いいさ」

「うむ、そんなら、承知してくれるんだな」

「あいさ、承知はするよ。だがお前さん、抱いて寝ようというんでなけりや、どうする気なのさ。まさかあたしのこの乳を、切つて取ろうというんじやあるまいね」

「うふふ、つまらぬえ心配はしなさんな。命に別条^{べつじょう}はありやアしねえ。ただおめえに、そのまま真ツ裸^{まばだか}になつてもらいてえだけさ」

「ええ裸になる。――」

「きまりが悪いか。今更きまりが悪いもなからう。――十年振りで、おまえのような体の女に巡^{めぐ}り合つたは天の佑^{たす}け、思う存分、その体を撫で廻しながら、この紙に描^かかしてもらいてえのが、おいらの頼みだ」

「そんならお前さんは、絵師^{えかき}さんかえ」

「まアそんなものかも知れねえ」

「面白くもない人が飛込んで来たもんだねえ。あたしの体は枕^{まくら}絵^えのお手本にやならないから、いつそ骨折損だよ」

しかし、そういいながらも、ぬつと立上つた女は、枕屏風を向うへ押しやると、いきなり細帯をするすると解^といて、歌麿の前に、颯^{さつ}と浴衣^{ゆかた}を脱^ぬぎすてた。

「さ、速く^{はや}どツからでも勝手に描^かいたらどう」

おそらく昼間飲んだ酒の酔^よを、そのまま寝崩れたためであろう。がっくりと根の抜けた島田^{まげ}鬘は大きく横に歪^{ゆが}んで、襟^{えり}足に乱れた毛の下に、ねつとりじんだ脂^{あぶら}汗^{あせ}が、剥^はげかかった白粉を緑^{ろく}青色^{しょういろ}に光らせた、その頸^{くび}筋^{すじ}から肩にかけての鮪^{まぐろ}の背のように盛り上った肉を、腹のほうから押し上げて、ぽてりと二つ、憎いまで張り切った乳房のふてぶてしさ。しかも胸の山からそのまま流れて、腰のあたりで一度大きく波を打った肉は、膝への線を割合にすんなり見せながら、体にしては小さい足を内輪に茶色に焼けた畳表を、やけに踏んでいるのだった。

「どうしたのさ、お前さん、早く描かなきゃ、行^{あんどん}燈の油が勿^{もつ}体^{たい}ないじゃないか」
が、歌麿は腰の矢立を抜き取ったまま、視線を釘^{くぎ}附^{つけ}にされたように、お近の胸のあたりを見つめて動こうとしなかった。

「ちえッ、なんて意気地がない人なんだろう」

そういつて女が苦笑した刹那^{せつな}だった。入口の雨戸が開いたと思う間もなく「おや、これは旦那」というお袋の声が聞えたが、すぐに頭の上で、追つかぶせるように、「こいつアめずらしい、歌麿だな」という皮肉な男の声が、いきなり歌麿の耳^じ朶^だを顫^{ふる}わせた。

「あッ。――」

「まア待ちねえ。逃げるにや及ばねえ」

「へえ。――」

しかし、こう答えた時の歌麿は、もはや入口の闕しきいを跨またいで、路地の溝板どぶいたを踏ふんでいた。

「か、駕籠屋かごや。か、茅場町かやばちようだ。――」

跣足はだしの歌麿は、通りがかりの駕籠屋を呼ぶにさえ、満足に声が出なかった。

三

自分の家の畳の上に坐つて、雇やとい婆ばあの汲くんでくれた水を、茶碗に二杯立続けに飲んで、歌麿は容易に動悸どうきがおさまらなかつた。

あの顔、あの声、あの足音。――それは如何いかに忘れようとしても、忘れることの出来ない、南町奉行みなみまちぶぎようの同心どうしん、渡辺金兵衛の姿なのだ。――

「つね。おもての雨戸の心張しんばりを、固くして、誰が来ても、決して開けちゃならねえぞ」

「はい」

「酒だ。それから、速く床をひいてくんねえ」

まごまごしている雇婆を急き立てて、冷のまの酒を、ぐっと一息に呷ると、歌麿の巨体は海鼠のように夜具の中に縮まってしまった。

「ああいやだ。――」

もう一度、ぶるぶるツと身を顫わせた歌麿は、何とかして金兵衛の姿を、眼の先から消そうと努めた。が、そうすればする程、却つてあの鬼のような金兵衛の顔は、まざまざと夜具の中の闇から、歌麿の前に迫るばかりであつた。

「もう二度と、白洲の砂利は踏みたくねえ」

歌麿は誰にいうともなく、拝むようにこういつて、掌を合せた。

その記憶は、五十日の手錠の刑に遭つた、あの一昨年的一件に外ならなかつた。

つばくろの白い腹がひらりとひとつ返る度毎に、空の色が澄んでくる、五月の半ばだつた。前夜画会の崩れから、京伝、蜀山、それに燕十の四人で、深川仲町なかつちやうの松江で飲んだ酒が醒め切れず、二日酔の頭痛が、やたらに頭を重くするところから、おつねに付けさせた迎い酒の一本を、寝たままこれから始めようとしていたあの時、格子の

手触りも荒々しく、案内も乞わずに上つて来た家主の治郎兵衛は、齒の根も合わぬまでに、あわてて歌麿の枕許へにじり寄つた。

「これはどうも。——」

歌麿は家主の顔を見ると同時に、唯事でないのを直感したもののそれにしては何んのことやら訳がわからず、重い頭を枕から離すと棒を呑んだように、布団の上に起き直つた。

「大層お早くから、どんな御用で。——」

「歌麿さん」

治郎兵衛は、まず改めて歌麿の名を呼んでから、ごくりと一つ固唾を飲んだ。

「へえ」

「お前さん、お気の毒だが、これから直ぐに、わたしと一緒に奉行所まで、行つてもらわにやならねえんだが。……」

「奉行所へ」

「うむ」

「何かの証人にでも招ばれますんで。——」

「ところが、そうでないんだ。お前さんのことで、今朝方、自身番から差紙が来たんだ」

「え、あつしのことで。——」

歌麿は、治郎兵衛の顔を見詰めたまま、二の句がつげなかった。

「名主さんや月番の人達も、みんなもう、自身番で待つてなさる。どんな御用でお前さんが招ばれるのか、そいつはわたし達にも判らないが、お上からのお呼び出しとなりやア、どうにも仕方がない。お気の毒だが、早速支度をして、わたしと一緒に行っておくんなさい」

「——」

「外のことと違って、行きにくいのはお察するが、どうもこればかりは素直に行つてもらわねえじゃア。……」

「へえ。——」

素直に。——それをいま、改めていわれるまでもなかった。生れて五十一年の間、悪所通いのしたい放題はしたし、普通の道楽者の十倍も余計に女の肌を知り尽して来はしたものの、いまだ、ただの一度も賽の目を争ったことはなし、まして人様の物を、塵ツ端一本でも盗んだ覚えは、露さらあるわけがなかった。さればこれまで、奉行所はおろか、自身番の土さえまったく踏んだことがなく、わずかに一度、落した大事な蓑入を、田

町の自身番からの差紙で、取りに來いといわれた時でさえ、病氣と偽って弟子の秀麿を代りにやつたくらい。好きなところは吉原で、嫌いなところはお役所だといつも口癖くちぐせのようにいつていたから察しても、大概たいがいその心持は、わかり過ぎるほどわかつている筈だつた。

その歌麿に、ところもあろうに、町奉行からの差紙は、何んとしても解せない大きな謎なぞであつた。歌麿は、夢に夢見る心持こもちで胸を暗くしながら、家主の指図に従つて、落度のないうように支度を整えると、人に顔を見られるのさえ苦しい思いで、まず自身番まで出向いて行つた。

自身番には、治郎兵衛のいつた通り、名主の幸右衛門と、その他月番の三人が、暗い顔を寄せ合つて待つていた。幸右衛門は、歌麿の顔を見ると、慰めるように声をかけた。

「飛んだことでお氣の毒だが、これア、何かお上の間違かみいに違いあるまい。お前さんのようなお人が仮かりにもお奉行所へ呼び出されるなんてことは、ほんとの災難だ。――だが心配は無用にさつしやい。天に眼あり。決して正直な者が罪に陥おちるようなことはありやアしねえからのう」

口の先では強いことをいつているものの、町役人達も、さすがに肚はらの中の不安は隠せな

かつたのであろう。同心渡辺金兵衛の迎いが、一刻でも遅いようにと、ひそかに祈る心は誰しも同じことであつた。

しかも五月の空は拭ぬぐつた如く藍色に晴れ、微風は子燕の羽をそよそよと撫なでていたが、歌麿の心は北国空のように、重く曇つたまま晴れなかつた。

四

それは正に、夢想むそうもしない罪科であつた。

両国広小路の地本問屋じほんどんや加賀屋吉右衛門から頼まれて大阪の絵師石田玉山が筆に成る（絵本太閤記）と同一趣向の絵を描いた、その図の二三が災わざわいして、吟味中入牢ぎんみちゆうじゆうろう仰付おおせつくといひ渡された時には歌麿は余りのことに、危あやうく白洲しらすへ卒倒そつとうしようとしたくらいだった。死んだような氣持で送つた牢内の三日間は、娑婆しゃばの三年よりも永かつた。——その三日の間に歌麿は、げっそり頬のこけたのを覚えた。

「これからは怖こわくて、絵筆が持てなくなりやした」

出牢後、五十日間の手錠てじょう、家主預けときまつて、再び己が画室に坐つた歌麿は、これま

でとは別人のように弱気になって、見舞に來た版はんもと元の誰彼を捕つかまえては、同じように牢内の恐ろしさを聞かせていたが、そのせいか「八十までは女と寝る」と豪語ごうごしていた、きのうまでの元気はどこへやら、今は急に、十年も年を取ったかと疑われるまでに、身心共に衰おとろえて、一杯の酒さえ目にすることなく、自ら進んで絵の具を解とこうなどという、そうした気配は、葉にしたくも見られなかった。

しとしとと雨の降る、午ひるさが下りだった。歌麿はいつものように机にもたれて茫然と、一坪の庭の紫陽花あじさいに注そそぐ、雨の脚あしを見詰めていた。と、あわててはいって來たおつねが、來客を知らせて來た。

「どなただか知らねえが、初めての方なら、病氣だといって、お断りしねえ」

「ですがお師匠さん、お客様は割わり下げ水すいのお旗本はたもと、阪上主水様さかもともんどからの、急なお使いだとおっしゃいますよ」

「なに、お旗本のお使いだと」

「そうでござんすよ。是非ともお目に掛けて、お願いしたいことがあるとおっしゃって。

……」

「どういう御用か知らねえが、お旗本のお使いならなおのこと、こんな態ざいじやお目に掛け

え備わつて、恰も菊之丞の濡衣を見るような凄艶さが溢れていた。

が、歌麿の微笑は冷たかつた。

「お旗本のお使いと聞いたから、滅多に粗相があつちやならねえと思つて断らせたんだが、なぜまともに、おきただといいなさらねえんだ」

「そういつたら、お師匠さんは、会つてはおくんなさいますまい。——永い間の御親切を無にして仇し男と、甲州くんだりまで逃げ出した挙句、江戸へ戻れば、阪上様のお屋敷敷公。さぞ憎い奴だと思し召したでござんしょう。——ですがお師匠さん。おきたの心は、やっぱり昔のままでござんす。ふとしたことから、お前さんの今度の災難を聞きつけましたが、そうと聞いては矢も楯も堪らず、お目に掛れる身でないのを知りながら、お面を被つてお訪ねしました。——ほんに飛んだ御難儀、お腰などおさすりしたい心でござんす」
黙つて眼を閉じていた歌麿は、そういつてにじり寄つたおきたの手の温みを膝許に感じた。

「いや、折角の志しだが、それには及ばねえ。今更お前さんに擦つてもらつたところで、ひびのはいったおれの体は、どうにもなりようがあるめえからの」

きのうまでの歌麿だったら、百に一つも、おきたの言葉を拒むわけはなかつたであろう。

まして七八年前までは、若い者が呆れるまでに、命までもと打込んでいた、当の相手のおきたではないか。向うからいわれるまでもなく、直ぐさま己が膝下へ引寄せずにはおかない筈なのだが、しかし手錠の中に細った歌麿の手首は、じつと組まれたまま動こうともしなかった。

「お師匠さん」

「――」

「お前さんは、殿様のお世話になつてゐるあたしが、怖くおなりでござんすか」

「そうかも知れねえ。おれアもうお侍と聞くと眼の前が真暗になるような気がする」

「おほほほ、弱いことをおつしやるじやござんせんか。そのような楽な手錠なら、はめていないものと同じこと、あたしが外して上げましょうから、いつそさつぱりと。……」

おきたは如何にも無造作に、歌麿の手錠に手をかけた。

「あ、いけねえ」

「そんな野暮な遠慮は、江戸じや流行りませんよ」

ぐいと手錠を逆に引張つた刹那、歌麿は右の手首に、刺すような疼痛を感じたが、忽ち黒い血潮がたらたらと青畳を染めた。

「あッ」

さすがにおきたは、驚いて手を放した。

「飛んだことをしてしまいました。――」

手速く、帯の間から取出したふところ紙は、血のにじんだ歌麿の手首に絡みついていていた。

「お痛うござんすか」

「――」

「何かお薬でも。……」

が、歌麿はうつむいたまま、一言も発しなかった。おもてを流して通る簾すだれ売うりの聲が、高く低く聞こえていた。

「師匠」

「えッ」

その声に、ぎよつとして面おもてを上げた歌麿の、くぼんだ眼に映うつったのは、庭先に佇たたずんだ、同心渡辺金兵衛の姿であつた。

この後、金兵衛の姿は、常に魔の如く、歌麿の脳裡のうりにこびりついて、寸時も消えることがなかった。

その金兵衛に、ところもあるうに、初めて訪ねた陰女やまねこの家で会ったのだった。跣足はだしのまま逃げた歌麿が、駕籠屋を呼ぶにさえ、満足に口がきけなかったのも、無理ではなかった。

「師匠」

昨夜の様子を、一刻も速く聞きたかったのであろう。まだ六つが鳴って間もないというのに彫師ほりしの亀吉は、にやにや笑いながら、画室の障子に手をかけた。

「師匠。——おや、こいつアいけねえ。ゆうべのお疲れでまだ夢の最中さいちゆうでげすね」

ふところから、吠かますと鉈なた豆煙管なたまめぎせるを取出した亀吉は、もう一度にやりと笑うと、おつねの出してくれた煙草盆で二三服立続けにすぱりすぱりとやっていたが、頭から夜具やぐを被かぶった歌麿が、小揺こゆるぎもしないのにいささか拍子ひょうし抜けがしたのであろう。しばし口の中で、何かぶつぶつつぶやと、立つて、勝手許にいるおつね婆のほうへ出かけて行った。

「おつねさん。師匠はまだ、なかなか起きそうにもねえから、あつしや一寸並木まで、用よ

達^{うたし}に行つて来るぜ」

「亀さんにも似合わない、お師匠さんが、こんなに早くお起きなさらないのは、知れきつてるじゃないか」

「知つちやアいるが、今朝^{けさ}ばかりは、別だろうと思つてよ」

「そんなことがあるものかね。大きな声じやいえないが、ゆうべは何か変つたことでもあつたと見えて、夢中で駈^{かけ}込んでくると、そのままあたしに床^{とこ}を取らせて寝ておしまいなんだもの。そう早く起きなさるわけはありやしないよ」

「ふん、だからよ。だからその変つたことのいきさつを、ゆっくり師匠^きに訊きてえんだ。

——まあいいや。半時ばかりで歸つて来るから、よろしくいつといてくんねえ」

亀吉の足音が、裏木戸の外へ消えてしまうと、怯^{おび}えた子供のように、歌麿は夜具^{えり}の襟^{えり}から顔を出して、あかりを見廻した。

「びつくりさせやがる。こんな早く来やがつて。——」

のこのこと床から這^はい出した歌麿は、手近の袋戸棚を開^あけると、そこから、寛政^{かんせい}六年に出版した「北国^{ほつこく}五色墨^{ごしきすみ}」の一枚を抜き出した。それはゆうべ会つた陰女^{やまねこ}のお近と寸分も違わない、茗荷屋^{みよがや}若鶴^{わかづる}の姿だつた。

「うむ、ひよつとするとこれやア姉妹きょうだいかも知れねえ。——だが、あいつの肌に、まともさわにま触る間もねえうちに、篋べらぼう棒な、あんな野郎が、あすこへ現れるなんて。——」

歌麿はそういいながら、手にした錦絵を枕許へ置こうとした。と、その瞬間、急に手先の痺しびれるのを感じた。

「こ、こいつア、いけねえ。——」

しかし、その語尾は、もはや舌が剛張こわばつて、思うようにいえなかった。

「お、つ、ね。——」

裏返しにされた亀の子のように、歌麿の巨軀きよくは、床の上でじたばたするばかりだった。

「大変ですよ。お師匠さんが大変ですよ」

おつねが、耳の遠い秀麿を、声限りに呼んでいるのを、歌麿は夢のように聞いていた。文化三年九月二十日の、鏡のような秋風が、江戸の大路おおじを流れていた。

青空文庫情報

底本：「歴史小説名作館⁸ 泰平にそむく」講談社

1992（平成4）年7月20日第1刷発行

初出：「面白倶楽部」光文社

1948（昭和23）年4月号

入力：大野晋

校正：noriko saito

2008年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

歌麿懺悔

江戸名人伝

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 邦枝完二

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>